遠隔看護システムによる妊産褥婦への活用の試み

長野県看護大学　清水嘉子　北山秋雄　宮澤美知留

本プロジェクトでは学術振興会の科学研究補助金（代表北山秋雄）を受け平成17年より遠隔看護の臨床試験が開始され、その一環として妊産褥婦への活用を試みた。対象はK市内に在住する妊婦1名であり倫理的配慮（大学の倫理委員会の承認を得ている）に基づいた文書による説明と同意を得ている。対象である妊産褥婦宅にパソコンを設置し大学に設置したパソコンと専用のソフトウェアを用いてインターネット(フレッツ･ADSL 40M回線)を介して接続し、パソコンに接続されたカメラとマイクを使用して、画像(約35万画素、動画は15画面/秒)と音声を同時に送受信した。妊娠期 3回、産後2回の大学側（担当助産師）と対象宅との交信を行った。大学側のディスプレイには、対象の映像（最大約16cm×21cm）、助産師の映像（最大約9cm×9cm）、および対象の基本情報が出力された。妊産褥婦用の基礎情報用紙並びに経過記録用紙を作成し、入力･閲覧や交信時録画などの確認を試み、システムの課題、今後の展開について検討した。大学側をひかり回線「Ｂフレッツ」に変更しシステムの安定性や映像の評価や、導入にかかる機器設置コストの課題がある。２１年度には、地域の助産所にシステムを導入し評価したいと考える。本システムにより音声に加え映像による交信が可能となり、指導の充実が図られ対象の安心が得られることが期待される。